

「然れど我が言は過ぎ逝くことなし」

マルコによる福音書 13章 24-31節

森島 牧人 牧師

今私たちが読んでいる聖書の箇所は、主イエスの出来事である十字架と復活の直前の場面で、エルサレムに着いて一歩踏み出された主の、この世との訣別と断念から来る足の重さを、私たちは忘れてはなりません。聖書は、果たすべき言動を全て終え、決然として宮を出て行かれる主の、その完成の意味として銅貨を二つ献げた寡婦の存在を記しています。

さて、与えられた13章の全体は小黙示録と呼ばれ、黙示文学的な表現で歴史の終わりを描いています。「そのとき、人の子が大なる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」(マルコ 13: 26-27)とあり、悪が神に勝利したかに見える次の瞬間、大逆転が起こって神の勝利が確定されると書かれています。終末には大軍を率いた人の子が悪魔を破り、第二の創造が行われ、イスラエルの残りの者が集められて神の支配が確立するというのが、黙示文学的終末の期待であり信仰でした。

ここで主が、メシア(キリスト)と同一視され、主イエスを指して用いられることの多い「人の子」という言葉を用いられているのは、終末に現れるメシアと御自身を重ねて見ておられることを暗示しています。私たちの信じている主イエス・キリストは、世に打ち棄てられた弱者を愛し、その重荷を共に負い、人々の足を洗い、その身代わりとなって十字架で罪を贖い、復活によって罪と死と悪魔の支配に打ち勝ち、人々に新しい永遠の命を与えた救い主ですが、黙示文学的終末を期待した当時の人々は、主イエスに政治的・軍事的メシア期待と超越的・奇跡的「人の子」期待を押し付けていたのです。しかし人々が期待しているような仕方で召命に応えようとはされなかった主が、何故ここで主イエスの言葉として黙示文学的終末信仰を表す言葉を残されているのか、私たちは注目せざるを得ません。これによって主は何を語ろうとされているのか。それを解く鍵は後半にあります。

先ずいちぢくの木の手で、「(いちぢくの木) 枝が、柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」(同 13: 28-29)と語りました。兆候があったら、その背後で神が何をされようとしているのかに目を向け、人の子が戸口まで来ていることに気づくようにとされています。人の子が戸口に来ているとは、主イエスの働きや語りかけを媒介として神の臨在は今や明白になっており、日常生活の一切に神の介入があることに気づきなさいとされているのです。

主イエスの伝道活動は一貫して「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(同 1: 15)にありました。主イエスの神の国運動の独自性は、主御自身の働きによって既に生ける神が地上に介入されその支配が始まったとし、同時に、終末の成就是神御自身の力によって歴史の終末の彼方に来るという点にありました。従って私たちの終末の信仰は、神の介入を信じ、主の下に現在を見、主の呼びかけに応える形で人生を歩むということになります。黙示文学の終末信仰の特徴は、終末という未来の光の下に現在を見、審判者なる神を意識して如何に生きるべきかを悟ることです。最後の審判である終末に於ける人の子の到来は、罪人の罪が明らかになると同時に、主イエスの贖罪を信じる者が救われる救いの日、救いの時なのです。

今日の聖書の場面の後、弟子たちを待っていたのは、自身の主への裏切りや主の十字架の死など絶望的なものばかりでしたが、しかしその背後で、主イエスの従順によって神の御計画は着々と進行していたのです。弟子たちと同じように弱く罪深い存在の私たちに主は、「この父なる神の救いの手を見よ」と言われています。そして、これが今日の御言葉の意味です。日々の生活の背後から主イエスの赦しの愛が注がれ、主イエスを復活させた神の力が私たちの罪深い肉をも生かしてくださる、それを信じるが故に私たちは、救いを確信し証しを続けるのです。私たちの人生の終わりの死に際しても、再臨の主イエス・キリストの赦しの愛を信じ、肉体の死を超える永遠の交わりに生かされていることを信じて一切を委ねるのです。

ここでの主の「はっきり言うておく。・・・天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(同 13: 30)との言葉が如何に恵みに満ちた心強い言葉であるかが分かります。「わたしの言葉」とは、終末を裁きの日から救いの日に変えた十字架の言葉、罪人をも赦すという言葉であり、これこそが、キリスト者が全ての人々に告げる福音の内容なのです。

(説教要約 羽入田悦子)